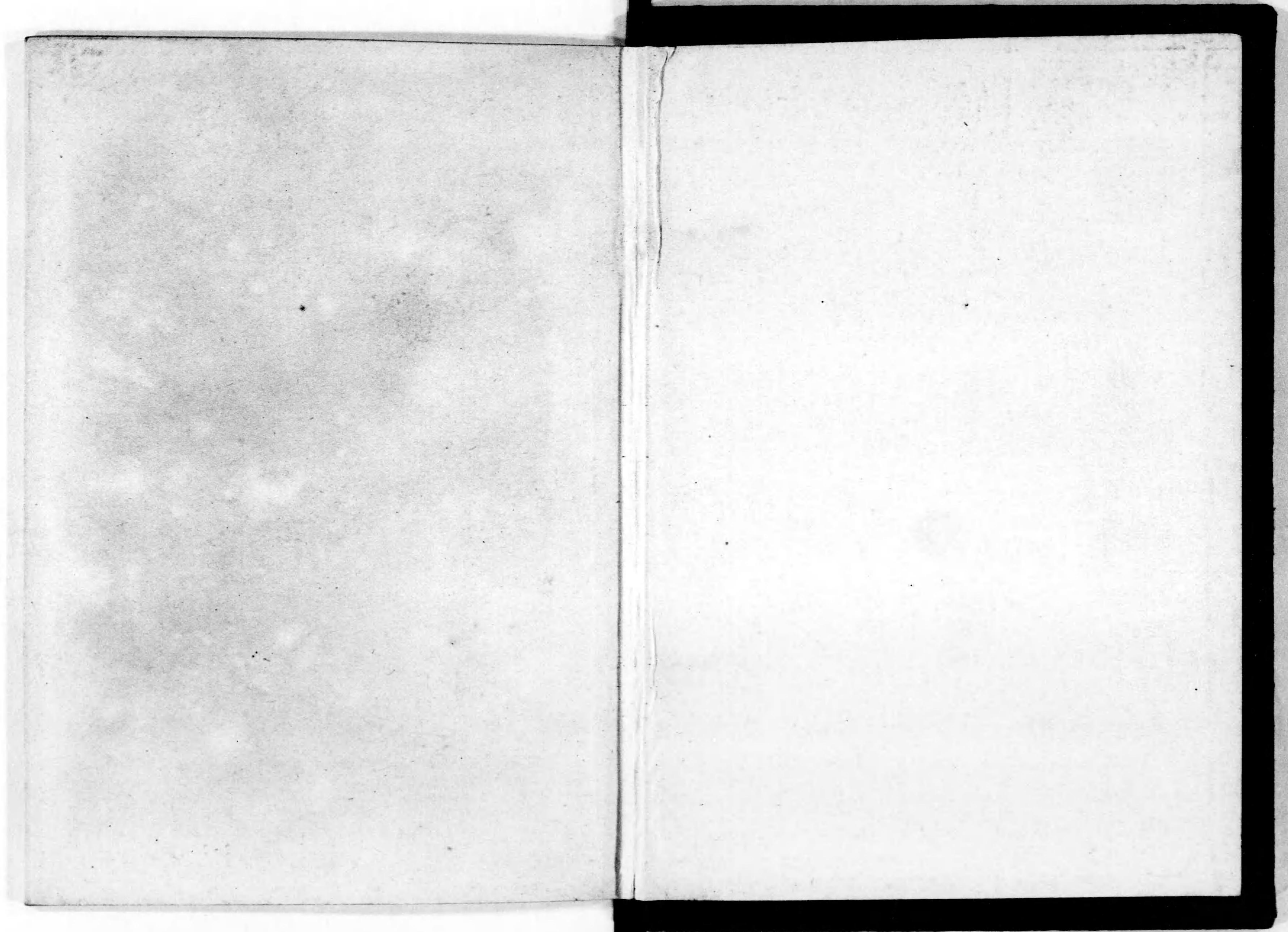
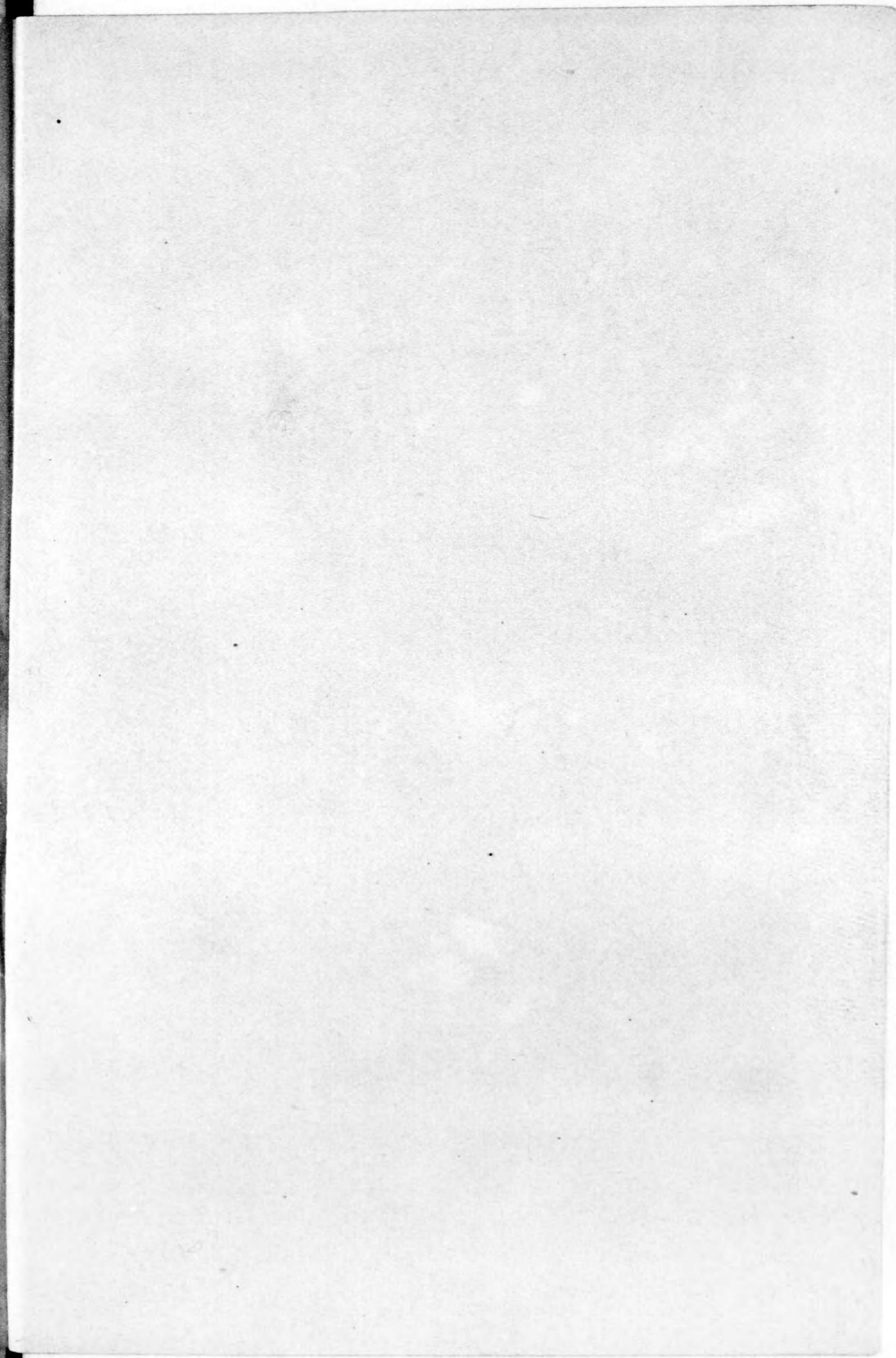
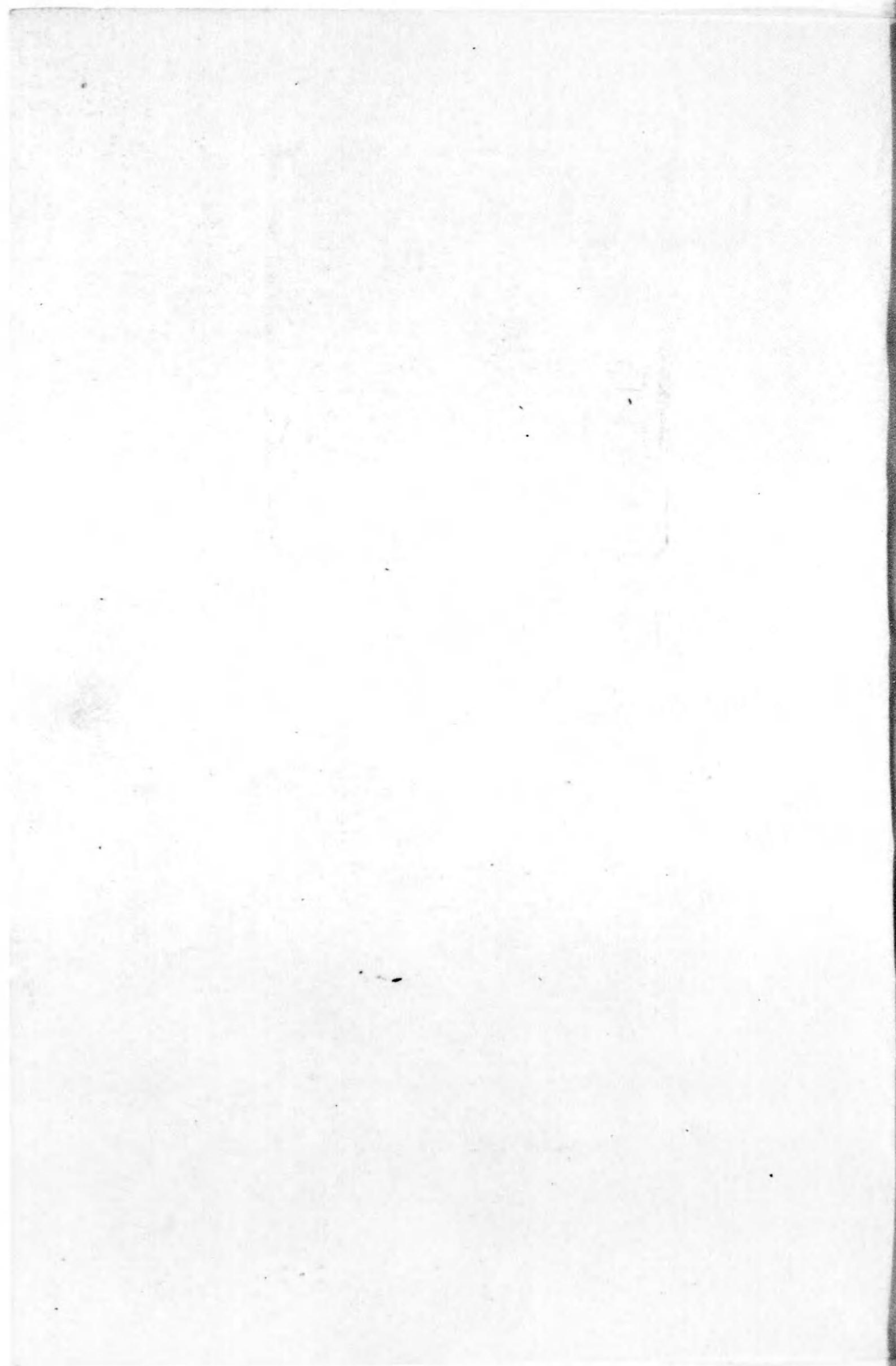


始







特 101

809



上

金子不



二十歳頃より今秋迄四ヶ年間の歌を輯  
めて本書を公にす。前田夕暮氏の好意  
によりてなり。茲に謹んで感謝の意を  
表す。

大正四年十二月

著者

## 序

金子君の歌集「波の上」が「詩歌叢書第二編」として愈々出るこゝになつた。

金子君と自分と知つたのは五六年前である。君が早稲田の豫科に入學すべく上京したときにあつたのがたしか初めてであるやうにおぼえてゐる。

全体に血色のよい、頬のほつと少女のやうに紅い  
瞳の黒い青年が黙つて自分と二時間も三時間も對  
座してゐた。矢張り自分が今此序文を書いてゐる  
机のわきに、その青年はいつまでも黙つて時々手元  
にある雜誌などを見ながら座つてゐた。晩春の日  
はうらうらと照り、雲雀が野の方で鳴いてゐるのが  
餘り遠くなくきこえてきた。その青年はほんさに  
黙つてゐた。自分も決して話上手ではないし、又話

に豊富ではないので、二人して黙り込んでしまつた。  
二人はかくして可成り長い時を費した。然しながら  
ら自分は何さなく此沈黙の數時間が愉快であつた。  
のみならずお互に黙してゐながら相理解しつつあ  
るのを感じた。そして、その青年の沈黙がいろ／＼  
の暗示を自分の心に投げてくれた。その青年は歸  
るさきも唯につこり笑つて黙つて歸つて行つた。  
彼は勿論「波の上」の作者金子不泣君であらねばなら

り。

其後何回もなく君に逢つてゐるのであるが、此最初の印象は決して自分を裏切るものではないといふことを思はしめられる。

4

金子君の歌に最も注意せらるるのは此沈黙の相<sup>すがた</sup>である。君は何れかさいふと表現上の技巧に擢んじた才能をもつてゐる人ではない。であるから、君

の歌は或はいろくの欠陥をもつてゐるかも知れぬ。が、君の歌を通じて流れてゐるこの沈黙の相は君の歌をして、より深みあるものにしてゐる。それから君の歌に同感せらるるのは現実的であることである。

5

君が明かに意識せずとも一箇の人としての眼ざめが君の心に喚起されつゝあることである。自然な歌ふにしても、どこまでも自己に即して主観的強



味に歌ひ出やうとする用意は、君の今後の作を期待せしめるものがある。

君は佐渡を郷里としてゐる。そして最初の上京後、間もなく病をえて郷里に歸つて以來全く佐渡の人として君の生涯は營まれつつある。君の歌に海の歌のおほいのはこれが爲めである。荒海の波の上に揺られて渡海する人の心、その島に黙つて生活

してゐるこの作者の心をおもふと何さなく強いシロツクを感じせしめられるのである

大正五年一月十二日深更

前田夕暮

## 波の上目次

序	前田夕暮
たはらぐみ	大正四年作 (二)
島山	大正三年作 (六七)
落葉	大正二年作 (一〇七)
寢臺	明治四十四年より 大正元年までの作 (一四二)

波の上

金子不泣

たはらぐみ

大正四年作

鷗一首

水平の上ほの明あかく青空の見ゆる方へと  
群れゆく鷗

草の芽を冬畑かげの黒土に見出でつお  
もふいましなりけり

竹藪の明るき入日ほそぼそと傍かたへの畑の  
焚火の煙

故郷なれど旅人に似し悲しみに横臥す  
山の白きをぞ見る

ゆめの如こころも遠く走る日の空にけ  
ぶれる吹雪かなしき

何と云ふ安きころになりしぞも事な  
く此日暮れにけるかも

たたずめば身内ひそかに悲しみの吐け  
るあり海の遠鳴り

旅なれば身にかかはりの一つなし死ぬ  
もうれしく雲雀をさまつ(道憶の歌三首)

さがみ野の田のをちこちに蛙なき青め  
る夜をわれえも寝ねす

ひつそりと犬ぞ堤に寝てゐたりわれは  
たびびとほのかに來たり

\*

障子に白く日の光り居り遠近に風のき  
こゆる春淺き朝

道ばたに散りし藁葉もいつもほご厭は  
しからず春空青み

春淺み雛菊一つほつかりと咲いて居た  
りき遠山白く



そことなく梅ぞ匂ひて地に藉けり汝なが  
まぼろしは闇にほのかに

花咲かぬ樹をさびしみつなで居ればわ  
が前に落つる夕日眞赤し

地に芽ぶく草ひそびそと叫きてほのか  
に赤きひるの太陽

山吹の芽ぶける枝のしなやかさをそれに  
もおもふいまとなりけり

三疋の犬もつれゆく麥畑の麥青々と惱  
ましき晝

夕日ふり草木はなべてかがやけりこの  
ひとときの春の尊さ

むらさきにゆふ山けぶり野の草木一せ  
いに陽にかがやけるかも

アネモネの赤きに見入る姉の子の眼に、  
さびしさのみゆる春の日

ひとり野を歩むゆふべは一草も身にし  
みじみと親しかりけり

河堤の茨に觸れて痛む指何ぼつねんと  
見て居しものか

麥の穂

いづかたか時の歩みのさこゆらめゆふ  
霧の中に麥、穂となるも

しづやかにこの世の生死しやうしおもひ居り穂  
麥の上に夕日あざやか

路傍みちばたの一草いさうすらも日を浴びて春を宿せ  
り尊しこの世

うつせみの流れてやまぬかなしみの春  
にあひけり遠山けふる

麥畑に菜鳥つづく野のこみちあるかな  
さかのかなしみするも

ふるさどに流離をおもふころかなし  
遠山の雪いまだ消えずも

根を張りて故郷に生きむさびしさの心  
動搖す野の明るさよ

たはらぐみ赤きが前におり立ちてひと  
りのころ慰めかねつ

たはらぐみ熟れたりければまだ若き汝<sup>な</sup>  
が母もうすく化粧<sup>けいざう</sup>して來ぬ

たはらぐみ汝がかへり待つさびしらに  
含みて種子を吐きにけるかも(巢鴨にて)

\*

去年こぞよりはたけのびにけり足の甲目に  
こそしるく肥りたりけれ

愁ひつつひとり歩める麥畑の行きつく  
るところ一もと青樹

青麥の穂未あかるむ畑の末囚人ら見ゆ  
屋根につごひつつ

かたはらの麥うす赤み夕つかた監獄の  
扉をゆきつくしけり

わがままのなれがこころぞ見えきたれ  
麥穂はややに赤るめるかな

わがままのなれがこころのつのととき  
避けてさびしく麥畑をゆく

遠<sup>た</sup>街<sup>が</sup>の<sup>ご</sup>よみきまつつしづかなるわが  
ふるさとの生活おもふ

ここに<sup>して</sup>故郷おもふおぼつかなゆふ  
かた街をあかるく行くも

江戸川の水菓子屋はもそのかみのその  
ままにして灯をともしをり

飾窓のグロキシニヤの葉よりわが瞳は  
なしてなれ見たりけり



郊外の雨くらしき夜の停車場になれは別  
れのうなじ下げしも

佐渡に歸る日

明けぬればここは磐城か野平のたのらのかなた  
山あり死ぬべくさびし

岩代山中

かたまりて躑躅真赤に咲き居れどこの  
山中に見る目えあかず

折ふしに眼にうつる躑躅赤けれどなれ  
ゆるどころ慰まぬなり

いはしろの山の峽間に躑躅咲き戀ひと  
きひとをはるかにぞする

船中

船窓にものおもひなし睡かにうつる浪の  
うねりの深々として

青光り螢は草を離れたりあきらめんと  
してあきらめられず

農夫らは麥刈り背負ひかへるなりよる  
べもあらぬこころとなれり

たはらぐみ熟れて終りとなりぬべしわ  
かれていますははるかなりけり

執着の悲しみゆるに目の前に飛ぶ螢す  
ら殺さんとする

水無月の水面<sup>みづの</sup>顛へてうす光り青き螢の  
流れ行きにけり

現身のいまは歎きの深ければ窓べに來  
啼く雀も悲し

つばくらの翻りゆく草の上草の青さに  
涙はながる

みづぎはに白さしやぼんの花咲けば夏  
の哀れの身にふかむかな

しみじみと馬鈴薯ぢやがたらいもは咲き初めて朝明け  
の空のほのかに哀し

\*

目に揺れて若葉の青の哀しまるれだん  
まりとわれたちつくしたり

ひつそりと人ぞ寝てあるけはひすれ熟  
麥の傍そばをわが通りけり

みちをいへ小さくまばゆく前を飛ぶ白

光りたる炎天の路

つばな白しかたへの草に牛が居て晝を  
ほのかに息はきにけり

海暮れてあたりひつそりなりゆけばひさき岬  
の浪の揺れ高さかな

天つ空夕暮れ行けば草山の男ばかりが  
黒かりしかな

かがまりて草刈る男暗く見ゆ蒼浪よす  
る岬はづれに

断崖の海に差し出し松哀しその松に來  
て啼くか蜩

草刈の少女ら寝ぬるそのほとりそとと  
ほりたり草いきれする

くさむらの晝を啼き居るまりざりすく  
さむら近く潮は寄する

岩かげに衣ぬぎ居れば岩の上を這ふ岩  
蟲も親しかりけり

岩の上に着物ぬぎ捨て岩蟲をさびしむ  
われの上の太陽  
41

海は青し浪にふかぶか身はうかび青き  
まなかに仰ぎたる陽よ



身はひつ海に入りゆくこころよさ心う  
れしみうつとりするも

簾透きて眞下に海の見えにけり竹切る  
音の聞えたりけり

盛んなる日の下にして濱人ら麥打ちる  
たりその音悲し

日に光る砂路の果に麥打てる人から見ゆ  
なり海を背にして

澄みわたる山際の藪のゆふぐれにふと  
もいましをおもひかなしむ

わがままの汝がころおもひさびしみ  
つ野草の赤さしみじみ見たり

島かげの岩にひたひた潮さしそこにど  
ほびとおもひ居しかも

あまざかる島かげに居てひとすぢにお  
もふこころのはかなさあはれ

米をとぐ母がながせるとき汁の白さを  
見居つかなしめるかな

初秋のくりやに馬<sup>い</sup>鈴<sup>も</sup>薯の皮むけるなれ  
ゆるふとも涙落しつ

はるやかにみなみの國に去にし子を露  
ふみ濡れておもふかなしく

あきらめのこころさびしくさし來ぬれ  
熟れて葡萄の色づけるころ

唇に酸ゆき葡萄をすひにつつ汝をおも  
ひあればゆふ日赤かり

いと赤き陽ぞ幻に見えにさたれ南の國  
に住む子おもへば

見も知らぬ南の國をおもへとや秋はあ  
まりに空のさびしき

停車場のうす明るみに汝が瞳見しこれ  
や汝を見し終りなりしか

山上

名も知らぬ地を這ふ草はかたまりて花  
つけ居たり高山の上

山葡萄熟れ初めにたる山澤にくだりて  
見たる陽の赤さはも

ほの白く夜もふけぬれば麥搗女聲合せ  
唄ふ唄のかなしさ

搗き終へし白をかこみてまんまるく麥  
搗女らは踊り初めしも

はや秋はひそかに來ぬれ麥搗女唄ふが  
上の空の青さよ

海にむかへる岩の窪みに衣ぬぎてわが  
裸身を愛しみにけり

山沿ひの小さき町をながれゆく踊り太  
鼓の音のかなしさよ

物かげにひとかたまりの鳳仙花咲き  
て秋のあぢきなさかな

秋來るあかとき風く西空に赤光る星を  
かなしみにけり

稻の穂の揺ぐかなたに灯<sup>ひ</sup>は細しさびし  
さの果にわれは來にけり

空の陽は黄ろくどんより傾きて嵐の前  
の樹のしづかなる

愛<sup>は</sup>きやし垂り髪少女幻に明るかりけり  
垂り髪少女

\*

星のみの空はかぐろみ夜はふけて秋な  
りひとの忘れかねつも

船窓に山見え來れば海の水河水まじへ  
黄に濁りたれ(河口)



かたはらの水寒みかも草むらに蝗飛び  
飛び秋空深し(越後平原)

\*

去<sup>い</sup>にしとぞおもひ極めこいましなほ都  
にありきわが驚きに

たはらぐみいまは落葉し初めにしか汝  
が家はふかく閉ぢ居たるかな

長さ柄の鍬を打ち振る農人の傍<sup>そば</sup>になん  
ばん赤かりしかも

水を見つ秋のながれの青き見つこころ  
はかへる汝なれの都に

霧ながるかなたはさがみ多摩河の水  
上にして涙ながしつ

たはらぐみその樹のかげのなつかし  
いまは小雨に濡れ居るらむか

たはらぐみ赤かりし日の悲しさよいま  
汝が母ははるかなるかな

ふとそれと見しは汝が腫か汝が姿たち  
まち家にかくれたりけり

ひと目汝が投げし腫はわがいのちわれ  
に光りしいのちなりけり

すべてみな逝けるなりけりたはらぐみ  
赤かりし日を戀へどすべなし

街上の並木の廣葉秋ふかく見上ぐる空  
の暗くもあるか

夜ふかく都去りゆく旅人に發車のベル  
は鋭ごかりけり

\*

信濃なる黄草の小野の涯高みそばたて  
る山に雪ふるらじも

無花果は日に日に熟れて秋ふかし遠居  
る人をあきらめかねつ

島山

大正三年作

風の中に刻むが如く小鳥啼く山にきた  
れば山の悲しき

\*

しづかにぞしづかにぞわれの悲しめり  
眼の前の山に狭霧かかれる

おとろへし心の底に静やかに落葉さく  
ごとし山に来て寝る

立枯の樹々と並べば生ける身のしみじ  
み悲し陽をともに浴ぶ

愛するかよ子なればひとづましんとこ  
て胸さへ冷ゆれ粉雪ふりくる

汝れおもふ心はるかにわたるかも川上  
にこそ氷雨降るらめ

しんとしてこころ氷雨の中に燃ゆまこ  
とやきみはいのちなりけり

汝おもへばこころはさきに燃ゆるなり  
はたはたと窓に吹雪は鳴れど

汝おもへば静かに臉なづるごとし夜の  
底ひより風吹き起る



まこと父の子なるあかしのなにかある  
疑へばこころ裂くるがごとし

汝れかよ子おもへば身をば雪は伏せし  
んたるこころ咽ばんとする

時計、時計、鋭く何を刻むぞやなれおもふ  
夜の暗きにありて

まことわれを愛するものはうら若きわ  
が母ならずかなしみ深し

汝が生れし川上へこそ急ぐなれ霜柱を  
ばさくさく踏みて

川楊ま白き花をつくるあり汝が生れし  
家見れどさびしき

朝の日のいまだ出でぬに急ぎけり汝が  
生れし家見むとかなしく

この夜更けあやしき熱の齒にのぼりあ  
かあかと灯の燃え居たりけり

死に近き身をあざやかに感せよと灯を  
見つむればあかあか燃ゆる

われとわが息をひそかに聴くごとく春  
の樹蔭の雪ふみて居り

ひろびろと野の草を踏みかなしめりひ  
とりさびしく生くることかも

暗きこころの只一すぢに明るみを求め  
て生くる、あはれめや太陽よ

眼を伏せてものなおもひそ春の日はた  
だ遠くして明るきものを

あはただしく眼を放ちやるゆふ空は風  
あるらしも雲の流るる

うす青み低き小佐渡の山並は野火に焼  
くるか窓に火近し

うち嘆き春日を仰ぐ眼の中にちらちら  
いのち燃えにけらすや

眼をそぢてありしながらの眞はだかに  
草原に寝ぬ天地しづけし

妹と呼ぶもかなしみ盡きざらめ空焼く  
るかなた汝は住まへるも

そのかみの海涯しなしそのかみの山常  
静か汝ししのばゆ

健康にかへりしごとし地の香のこの地  
の香の忘れがたなき

閉づるとなく見ひらくとなく眼を空に  
ただひとすすにやればさびしき

汝を見む願ひは生きて顛へどもいとほ  
るかなりひとつまなれば

ものみなは過ぎゆけるなり白玉のここ  
ろも染まり夜をかなしめり

佐渡の山やまなみ低く海に入るその海  
近く汝が住める家

なげやりのこころか晝の樹の下にぼつ  
ねんとしてわが立ちにけり

並み立てる桐の樹はやも花つけぬさび  
しや樹の間遠山低し

山の端の入日ぞ焼くる汝が方ゆ啼きか  
へるぞも群れ鴉らは

海に入る岬のふもとに水無月の青み渡  
りてはまなすの咲く

水無月の柏の廣葉に日は注ぎ黙せるわ  
れの額かぎりけり

ここにして汝が方見れば浪白う濱に寄  
るなり水無月のくれ

飢え飢えて求むるこころ火の如し眞赤  
きダリア日に向きて咲く

崖上の一本路は日に光る炎天なれば日  
に白光る



月かげは青蚊帳越しにさしくれば見る  
眼も青く澄みわたるなる

うつせみの生死をおもふわれなりきか  
なたに燃ゆる野火の赤しも

水いろに澄むはつ秋の山を背に燃え上  
る野火の親しくもあるか

いつまでも生死のおもひ去りやらず立  
つ暮れ方の樹きより風する

弟の健康をこそ祈らるれ河邊くさむら  
風流るなり

ひとり生くる身は黙されて悲しかり青  
の一樹の秋風に鳴る

青き樹も葉を顛はせて秋風に嘆かひす  
るやさびしき生きやう

山の端になかば沈みし眞赤なる入り日  
の見するこの幻は

自らを欺き馴れて易らかに生くるかな  
しさゆふ空を見る

もろこしの葉するに動く秋見ればおの  
がいのちのいとほこきかな

秋浅き青の梢にかがやける日の光り見  
て生きをしぞおもふ

\*

霧らふ日のなかにかすかに山の色見え  
てかなしも船に上れば

輕井澤疎林は廣き高原の一隅にこそ黙  
し立つなれ

いかにかなしく眼にうつるぞや旅なれ  
ば秋高原に建てる洋館

レイル越え向側より君を見ぬ遙か佐渡  
へとかへらねばならず

\*

うす暗の縁の柱に立ち居ればそとより  
て汝はわが手取りたれ

きみが父きみがみ母ともろともにより  
そひ行きしその夜のちまた

たびなれば汝を都に残し置きゆく旅な  
れば涙ぞしげき

おちばおちば線路に沿へる樹々はみな  
落葉するなりいましをおもふ

鳥山にともしび見えつ佐渡近みわが船  
の上に夜は來にけり

背になびく汝がかみおもふ秋の山うる  
しの廣葉風にゆらぐも

あな尊、背戸にいづればみづいろに澄み  
わたりたるとほ山の見ゆ

これやこのわが身かなしく冬の日のま  
ばら青草踏みにけるかも

あきらめて見やるあなたに落つる日よ  
樹によれば涙流れてやまず

見てあれどころ足らはぬかなしさよ  
日に光りつつ連れる山

冬の水空をうつしてしづかなりいまひ  
ややかにわれかへり見る

青き空わづかに見えてかなしかり低く  
連なる山々の上に

闇の中に羽ばたきなしつ何鳥か裂くが  
に叫ぶわれの寢覺めに

きこゆるは河瀬の音かうすけぶる疎林  
のかげゆ見ゆる野暗し

うすら光り空を飛びゆく鳥にすら孤獨  
は胸に喰み入るごとし

まさびしく冬を籠れる窓さきの山なみ  
の上青空見ゆれ

電燈の光り疎らにわが住める村の家並  
の上の冬空



落葉

大正二年作

妹等と住めば清けしひとすぢのわがゆ  
くみちのさびしけれども

みづからをいとしむこころ明るみぬ落  
葉の土にかへるゆふべは

落葉集め火をばうつせばほそぼそとわ  
がかなしみの蒼み出でにけり

氷<sup>ひ</sup>雨<sup>あめ</sup>降りこころの上<sup>うへ</sup>にひそびそと冷え  
し血流<sup>ちゆうりゆう</sup>る空<sup>そら</sup>を見入<sup>みい</sup>れば

ほそぼそとわれのいのちに一<sup>ひと</sup>すぢの煙<sup>けむり</sup>  
となりてかなしみ燃<sup>も</sup>ゆる

行き倒<sup>たふ</sup>れ死<sup>し</sup>なば落<sup>お</sup>葉<sup>は</sup>のどこしへに降<sup>ふ</sup>り  
つむらんかかなしきむくろに

落<sup>お</sup>葉<sup>は</sup>ばやしゆふ日<sup>ひ</sup>明<sup>あ</sup>るくこころまたあ  
かるみそめぬ甘<sup>あま</sup>ゆるがにも

冬山かげうなごを垂れてわが行けば霜  
のくづるる音のさびしさ

薔薇を植えてこころ安らに静まりぬこ  
よひは深き眠りにおちむ

何ら云ふ言葉もあらず對ひ居ればわが  
身も澄めり雪の遠山

蒼浪の引けばおのれの黒き影渚に落し  
餌をあさる鳥

ありやなしゆふべこころのかなしみの  
底にひびきて雁かりかの啼く

親しき地つちのいろかなこの日大空の晴れ  
てわが眼に暗きかげなし

僧院へわがこの身をば生まながらのむ  
くろとなして運び行かまし

死の如く今宵ひそかに地つちに敷く月かげ  
あらむわが寝ぬる間に

健やかに玉の如くも生ひ立ちし君を讃  
へんこのゆふべこそ

魂のつゆ通はざる肉親を持つはさびし  
き極みなるらむ

若ければわが血静かにわきて來れ静か  
に沈む夜の底ひに

死なむとぞおもひ極めて立ちしかの海  
岸の浪明るかりけり

うるはしき憂愁の中にわが姿ありやな  
じやの影を見するも

たまゆらに消ゆるいのちのいとほしさ  
いとほしさあはれ涙とどまらず

薔薇咲きぬわれのめぐりの紅あかの色やが  
て消えなむ身にはさびしき

清くさびしくしばしのいのち墓場まで  
保ちゆかばやみづから哀し

遠山に五月なかばのうすき雪見居つつ  
しのぶわれのこしかた

たまゆらのおののきふとも身を襲ひ手  
にせる薔薇を地におとしけり

かの野邊の草にふただび臥さしめよ病  
めるおもひの清かりしかな

\*

空曇り風もすこしく出でにけり弟をお  
もふ青浪の上



卓の上に摘み來し薔薇をことごとく散  
らさむ紅あかの眼に痛き色

かりそめの愁ひのかげに濡れわたる臉  
に觸るる夜のそよかせ

衰へし顔にさしくる影ふかし夏の野に  
寝て見入る空の陽

一片の罌粟の花すら暗く明くかげを作  
れり哀しき日光

ダリア赤しゆふ日流るる中にゐてわが  
衰へを知れるさびしさ

あたたかうわれの姿を紅薔薇の中に描  
きて涙にひたる

紅薔薇のあまき香ひの中にしも消えな  
むとするさびしきいのち

涙にぞ親しましめよこのゆふへおもふ  
はるけき人々の上

思はるるこのさびしさのさひはひか何  
か涙のながれ出でけり

白玉の純なる生命秋花の散り易きにも  
似て哀しけれ

青き葉をちぎり落ちて吹く風の中にわ  
れあり世は秋となる

島をめぐる海に秋立ちわが愛する凡て  
の人を運び去りにけり

冬來なば眞白き床に寝ぬるべし眠りよ  
永く醒ますまじいぞ

海邊にて七首

わが前に酒の香ひのいと高き男歩むな  
り秋の日哀し

空暗く曇ればこころまた曇る秋の岩こ  
そくろみ立ちけれ

引けど押せど岩に吸ひつき離れ來ぬ貝  
を哀しむ秋の岩間に

海に來ればまづ悲しみの燃ゆるなり海  
のいろこそ親しかりけれ

何ものをか求め行きけるわが心荒海に  
鳴く鳥とならずや

橋の海邊に散れる落葉にぞまづわが影  
の亂れ入りけり

いぶかしき人の匂ひを戀ひ求め這ひ來  
し蟲か砂に座れば

遠き地に病む兒訪はんとあらしの夜出  
で行く親に菊の花暗し

\*

魂の通ふならぬを少女子に戀ふるわれ  
をばいかに呪はむ

あはれこの身いたまし君に戀ふるため  
玉の如くに健やかならば

一こほにわが身いぢらし弱き身のいぢ  
らし人に戀ふると云ふに

許されぬわれにさびしき愛なるか夜わ  
たる風の胸いたましむ

いかに烈しく北の空より吹く風ぞ君に  
おもひの静かならぬ夜

死より深く君をおもへるわがこころか  
たへ明るくかたへは暗し

秋の日の前に獨りし立ちにけるこの生  
きものの姿はかなし

わがいのちすべてをつくし戀ふる日も  
ゆふ空低く垂れてありけり

空色の草花ひとつ摘まんにも小指ふる  
ふは人戀ふればか



ふと觸るればこころの傷のいたみ出づ  
君のひとみは及のことし

悲しみに涙ながさじ一すぢにわが行く  
道は開かれにけり

あきつあきつ汝れもいまもの青空に高  
く群れ飛ぶ見れば悲しも

寢

臺

明治四十四年より  
大正元年までの作

病院にて

なつかしうわが世のをはり見え來たれ  
死よ死よいまは汝なれをおそれじ

おもふもかなしあまき夢をば眼に見せ  
てもてあそびたる幾とせなるぞ

ニコライの濁れる鐘を耳近くきく夜は  
かなしわが世消えなむ

身をそこなひ心を破り辛うじてたどる  
わが世の果てのなつかし

あめつちのひとりはかくもさびしさや  
生くるもひとり死ぬるもひとり

窓の下を日毎に通ふ少女らもいまはわ  
が世にかかはりもなし

一たびはかの日にこころ歸れよと祈ら  
れもする夜の空の色

怖ろしきはわれをおほへる夜の空の暗  
さに似たる運命の手ぞ

執ねくも生くる力のまつはりてなほ死  
にも得ず死をおもふのみ

ああなかばこころ亂れてそと寄れば肌  
に冷たき寢臺の白さ

ひさびさに空の明るさ見しゆふべ都の  
上を啼きわたる雁

君おもふ涙こよなく流れ來ぬ死ぬる際  
にもなほおもふらむ

大空は雲を浮べぬふとも死におびやか  
されて驚くこころ

黒き花ふと夜の夢に入りしかの黒き花  
咲く日を待ちもすれ

\*

こころ重く沈めば青き額をばふかく埋  
むる臥床たふなつかし

雁わたる夜半のこころ堪へがたく祈ら  
んとして臥床たふに坐る

みどりうすく褪せたる壁に這ひ寄れる  
初冬の日の涙はしらしむ

血の如く赤く濁れる水薬のわが枕べに  
あるがさびしき

仰ぎ見るうすら緑の褪せし壁病者の心  
うごめくところ

手をやれば寝臺の鐵にふと觸れて冷た  
き夜半を軽くおびゆる

おのが血を飲むが如くにおもはるる赤  
く濁れる水薬のいろ



階段をひとり庭へと下り立ちぬ生いのち命いのちさ  
びしくなりて冬來ぬ

死を夢む若きころに明るみて夕の窓  
に灯のともりたる

ふるさとの山には雪の白からむ哀しく  
も眼のうるほひて来る

明日あすと云ふ日をばおもはじ果敢なくも  
今日の一日に浸りて生くる

弾力の強き寢臺にうち臥して夜空を望  
み沈める瞳

ふるさとの空の曇りも晴やかなこの青  
空につづくかさびし

軽々とわれを乗せたる籐椅子のうしろ  
に白く匂ふ柘

病室の壁もわが眼に馴れぬげに病院の  
夜の長かりしかな

夜はひろく空にひろがりゆるやかに呼  
吸する中にわれも呼吸する

慣るるてふ力おそろし死ぬ人の前にあ  
りてもえ笑ふ汝等なれら

カルタ切る指の白きに觸れ易くうち細  
りたりわが神経は

横顔に見入れるわれのしばらくの夢見  
ごころを許させたまへ

青空よさびしき歌の唇を洩れ出づる日  
のゆふまぐれかな

汗ばめる胸を両手にかき抱き寢臺によ  
れば涙流るる

ひたすらに死をおへば眼もくらく空に  
日はなし地は冷たしも

まごかけを揚ぐると窓により添ひし看  
護婦の裳にふくらめる風

退院

一筋の光にすがり這ひ出づる蟲かや吾  
にめぐれる初春

太陽よ汝を大空に仰ぎしも久しかりけ  
りわが世尊し

\*

短かければわれらのいのち幸ひの薄か  
りしとはゆめおもふなよ

あひ別れ見まじき汝<sup>なれ</sup>を故郷にやるにえ  
堪へじ涙<sup>なみだ</sup>繁なる

相ともにあれば戀ふるを知らざりき別  
れとともにおもひ燃ゆるか

明日も見ず明後日も見得ず永へに見る  
ことなきか汝がうしろ影

病得て國にかへらむ汝がこころわれが  
こころと會ひ得てかなし

短かかるべしと相よりともどものいのちあはれにさびしみしかな

一年は夢の心地か國を出で傷きてまた  
歸る汝に

上總の國汝が故郷の山かげに静かなる  
べし汝待つ家は

汝がいま國へかへらむ心にぞわれを見  
出でてさびしかりけり

いまにこして君戀ふる血のひそみしを知  
りてさびしき夜となりにけり

汝<sup>なれ</sup>死ぬも知らでわれ生きわれ死ぬも知  
らでいづくか生きてあるべし

汝が指をわが掌に握りしめ泣かばとお  
もふこのゆふぐれを

大空を渡る小鳥の瞳に燃ゆる春はいた  
まし草に夕陽<sup>ゆふひ</sup>す



玻璃窓に来てはあかあか燃ゆる陽<sup>ひ</sup>よお  
もひ燃ゆれば眼になしあめつち

大空の暗きに流る風の音に誘はれて浮  
き出づる悲しみ

かなしみはわれ自らのかなしみぞ暗さ  
渚にうづくまり居る

夜の暗きにうづくまり居るはわれひと  
りおもへばこの世消ゆるがごとし

相模行

哀しみて落ち行くわれに運命の火の如  
燃えて空に陽は照る、

避け難き運命の手の絶えずわが眼には  
うつれり窓に海見ゆ

とかけ走り麥の畑にかくれたり行く手  
に見ゆる海の色哀し

望みすでに捨てて来りぬ相模野の草に  
抱かれただ肥ゆるべし

わが片身われの少女はいづこぞや睡る  
夜まくらに響く濤の音

草に寝て覺むれば涙流れ居きかなしき  
夢をひそかに見しや

麥の穂を摘まんとのべし指先にしみじ  
みしめる夕日の赤さ

うるはしきわが幻に灯<sup>ひ</sup>ぞともせ燃ゆる  
がままに夏の野暮るる

わが寝ねしほとりに匂ふ野薔薇あり初  
夏のこころ蟲の如く動く

相模河白き砂路に夏の來て長くもわれ  
の影曳けるかな

若さもて光るわが顔草にうめ初夏の野  
の草の香をかぐ